
神の子戦争

happyapple

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の子戦争

【Nコード】

N2846R

【作者名】

happyapple

【あらすじ】

世界に産み落とされた5人の神の子。それぞれが、神の一部を受け継ぎ始まる戦争。誰が最後まで残るのか。最後まで残ったものが王となり、また次のゲームを始める。これは、そう、ゲームだ・・・

ブログ（前書き）

なんだか、書きたくなったので書いてみちゃいました。最近は、エッセイやら雑誌作りやらで大変でぜんぜん更新していません。けど、来週になれば、歯を4本抜いて1週間休みがあるからのんびり書けると思います。

プロローグ

神の子らよ、旅立て

．．．．．ふむ、そろそろだ

神の子が5人。

．．．．．王位はいただく

神が5人。

．．．．．勝負は最後まで分らんぞ

王が一人。

．．．．．生死を賭けたゲーム

参加者は神の子5人。

．．．．．ふん、お主の子には負けん

しかし、選ばれるのは一人。

そして、始まった
次期、天界の王を決める戦争が

それぞれが生まれ落とされ
運命の齒車に組み込まれ
刻々と迫るその時を待つ

戦え、神の子よ
奪え、神の子よ
お主らの最強を王にしよう

それは、王が決めた一つのゲーム

さあ、始めよう……

それぞれがどこにいるかも知らずに始まる
人との見分けが付かず
しかし、必然的、運命的に定められた出会い

神の子らよ、旅立て

プロローグ（後書き）

まあ、プロローグだからまだぜんぜん分からないかもしれませんが。
まあ、ゲームは居たってシンプルだと思います。

e p i s o d e 0 1

B i r t h (前書き)

あまり、まだ内容には触れない文です。やっぱし、自分の文章は短いような気がします。でも、長くと時間が掛かるのでなるべくコンパクトにしていきたいと思います。時間ができたら長い文章が書きたいですね。

episode 1

Birth

産み落とされる。

どの時代の、どの国の、どの地域かも分からない場所に
産み落とされた。

誕生かもしれない。
憑依かもしれない。
何も分からない状態で産み落とされた。

初めての母親の顔。
初めての父親のぬくもり。
すべての経験が新しく、でも、どこか懐かしく。
すべてが、俺を眠りに誘った。

そんな事は、一瞬の出来事だった

親

それは、自分を産んだもの。
神の子と言われるが、実際父親の神が産んだわけではない。
人間的に言う『養子』のようなものだ。

神が地上に降りてきて、そこで人間から選り抜く
より、自分に合った人間を。
そして、その人物が死ぬまで待つ。
大抵は早死にをする。
選ばれた者の宿命のようなものだ。
俺は交通事故で死んだ。
大概は、事故死、突然死、病死。
と目立たないように死ぬらしい。

この点で言うと、俺は親という者に親しくない。
死んだときに、前世の未練がなくなるようになってる。

だから、今回の親に何か期待していたのかもしれない。
そして、裏切られた。

生まれて半年

俺は捨てられた

捨てられたのはある孤児院だった。

それは、十字架を飾っていた所を見ると教会でもあるのだろう。
その玄関前に俺の親は置いていった。

寒い夜だった。

雨が降り。

風が吹き。

雷鳴がとどろいた。

そんな中僕は引き取られた。

見ず知らずの、親でもない、ましてや知り合いでもない。
ある……神父に。

「君のお名前は？」

優しく聞いてくる神父の顔を見上げる

優しいような顔をしている。

やや鋭い目には優しさが籠っていた。

その顔のしわから語られる幸せな日々。

顔に見せる絶やさない笑顔。

「あーうー」

生後半年と言う短い間で覚えたこと。

答えはすべて「あーうー」

俺の親が喜んでくれた一言だ。

「うーん……分かるはずないよなー」

頭をぽりぽりかきながら、あちゃー、と声を漏らす。

「まあ、いいか。じゃあ、僕が名付けよう。君は今日からアンシュ

ルス・ディアンとしよう。」

アンシュルス・ディアン、始めて自分の証明となる事実。自分が自分であると教えてくれる因子。

「あー」

そして了承すると言うように僕は答える

「おお、気に入ってくれたか。そうかそうか、それはよかった。お
お、言い忘れていた。私の名前はローガ・ディアン。今日から君の
父親だ。」

それが、俺とローガの出会いだった。

雨は止み、風が穏やかになり、雷鳴が止んだ。

もう、寒い夜ではなかった。

もう、一人ではなかった。家族ができた。

俺が孤児院に拾われ4年余りの月日が経った。
俺はもうすぐ5歳になる。

そうなれば孤児院の手伝いができるようになる。

この孤児院。名前は『救いの宿』という。

全く孤児院の響きがないし、辺鄙なところに出来ている。

近くの町までは1時間以上歩かなければならない。（大人の速度で）
しかし、なぜかここは人が多い。

俺には妹が2人、弟が1人、兄が1人、姉が1人いる。

妹達の名前は、イラ・ディアンとイル・ディアン。

この二人の名付け親もローガである。

イラが今2歳、イルが3歳である。

弟の名前はハンス・ディアン。

歳は3歳とイルと同じ年。

親がここに届けに来たあたりわけありのようだ。

兄の名前は一・ヨアン・ディアン。
めいじは

家族の中で唯一の東洋人風の人物である。

一はローガが旧世界というところに行ったときに拾ってきた。
歳は10歳と離れている。

力仕事は兄がやっている。

姉の名前はリサ・ディアン。

水精霊の種族で、歳は11歳と兄妹の中では一番年上だ。家事全般が彼女の役目に当たる。

そして俺。

俺の名前はアンシユルス・ディアン。

種族は未だ教えられていない。

俺の役目は弟と妹達の世話、と言う名の、遊び相手である。俺が5歳になったら弟のハンスがこの役目を担う事になると、言っても遊ぶだけだから簡単だけど。

そして5歳になった今俺はリサの手伝いをしている。

「アッシュ、塩コショウとってくれる？」

と、言っても小物を運んだりちりとりだったり小さい役目だが。

そういうことをリサに言う

『いいのよそんなこと。アッシュが手伝ってくれて私はすごくうれ

しいのよ？』

と僕を励ましてくれる。

そのおかげで嫌気がささずに手伝いができるのだ。

「はい。リサ姉」

すぐに塩コショウを手渡すといつものように、ありがと、と応えてくれる

そしてそろそろ夕飯時なのでテーブルを布巾で拭く。
そういった雑用気味の仕事が僕の仕事だ。

「アッシュ、そろそろみんなを呼んできてくれる？」

「わかったー」

そう言つて2つほどドアを開けた部屋にいる弟と妹達を呼びに行く。
そこにいたのは3人で仲良く絵本を読んでいるイル、イラとハンスであつた。

絵本の冊数も少ない孤児院では同じ本を何度も読まないといけないが。

毎回誰かがアドリブに読み話が変わっているので飽きる事を知らない弟と妹達である。

「イル、イラ、ハンス。夕飯だから食卓に集まれよ」

「「はい」」

そして、孤児院の裏に出て呼びに行くのは、一。

「ヨアン兄、夕飯だつてさー！」

「ああ。分かった」

薪を割っていたのだろう。

斧を片手に持ち上半身裸の男が木の幹に座っている。

そして壁のほうには大量の薪が用意されている。

「たくさんあるね？」

実際こんなに必要なのだろうか？

「あ？たくさんあったほうが後でやらなくてすむだろ？それにそろそろ冬に入るし。」

と、少しバカだが、ちゃんと先のことを考える兄である。

そして最後に呼びにくい我等が父　ローガ・ディアン　である。

父さんはいつも夕飯時は礼拝堂にいる。

そこで静かに十字架を眺めているのが日課らしい。

そして、僕もそこに静かに近づく。

「父さん、夕飯だよ」

出来るだけ静かな声で話しかける

「ああ、ありがとうアッシュ」

振り向かないで答える父さん

でも、それは今やっていることに集中しているからであって無愛想なわけではない。

全員が食卓に集まると

リサが全員の皿に食べ物を入れる。

今日の夕飯はシチューだ。

その温かさは家族の味だといつも父さんが言うので

家の夕飯は4割くらいがシチューになる。

でも、みんなもシチューが好きで文句を言うものは出なかった。

きっと、明日も白いシチューを食べるのだろう。

e p i s o d e 0 1

B i r t h (後書き)

なんだか、意味不明な最後でしたww家族の温かさを表現したかったのですが。

episode 2 Change (前書き)

なんだか、急展開過ぎたと思う。でも、なんだか話を頭の中で考えてるうちに、次に次にと急がされた気がする。そこは今回の反省点です。

episode 2 C h a n g e

生まれ、知り、育ち、変わる。
人間の理とは単純なものだ。

神に理などない。

あえていうなれば、神こそが理なのだ。
寿命もなければ、最初から知っている、育つ事を知らず、変わるこ
とのない。

普遍的な存在

それこそが神

神の子は一応は神の部類に入る

寿命はないし、成長もしない、知識欲もなければ、探究心もない。
人間の子供とは大分違う。

だからだろうか？

このゲームが行われるとき神の子には感情が芽生える。
それは、喜びだったり、悲しみだったり、憎悪だったり。

戸惑うことなく神の子はその与えられた感情に従い。
いずれ、また新しい感情が目覚める。

何も知らない赤ん坊から

少しずつ変わり

子供になり、大人になる。

しかし、運命とは残酷だよ。

神の子、君達は殺しあう関係なのだから。

e p i s o d e 0 2 C h a n g e

世界が変わる……

そんなこと実際にはありえない。
天と地がひっくり返ったような感覚。
今までの生活が何かの拍子に一気に壊れる

一通の手紙が届いた

それは今朝早いときの事だった
季節は冬、朝は程よく寒さが肌にあたる頃だ
毎朝の日課としてやっている町までの買出しは荒れてきた頃だった

ドアを開けたら手紙があった
なんの変わったところのないその手紙がどこか違和感があった。
なにか心が疼いた、悪寒が背筋を走った。
・・・生理的に受け付けない、とはこのことだろう。

「うつ・・・」

手を口に当て吐き気を抑える

孤児院の中に駆け込みローガを呼ぶ

「ローガ・・・手紙が・・・玄関」

単語だけはき捨てて俺は自分の部屋のベッドに戻ってしまった

寒気が増した。

ベッドの中にもいてもまるで、凍えるような寒さを感じた。

それでも、自分を無理矢理寝かそうと目を強く瞑るのであった。

SIDEローガ

今朝、私の息子の一人、アンシユルス、が顔を青くして入ってきた何事かと聞こうとしたが、用件だけ言ってさっさと帰ってしまった。

用件とは一通の手紙の事だ

何の辺鄙もない、たった一通の手紙・・・

その封を切り中身を読み始める

そして理解する。

アンシユルスが青くなつた理由を。

開けなくとも分かってしまったのだらう。

それから、アンシユルス以外の家族を集めた。
娘達はアンシユルスのがまだ寝ていると言った。
当然うなされていたと。

「今日は、お前等に大事な事を言わないといけない……………」

「なんだよ、真面目な顔に合わないぞ親父」
そんな冗談を言うー

「冗談じゃないんだ……………アンシユルスの事だ」

「アツシュがどうしたの？」
この中で一番心配性のリサが一番に分かったのだろう。
それでも、聞いてくるのはきつと認めたくないからだろう。
今まで一緒に居た家族がどこかへ行ってしまうのは。

「アツシュの親から手紙が届いた」

「「なっ！」」

「え？」

「「・・・」」

妹達が顔を驚愕で染める。

弟は何を言われたか分からないよう。

兄と姉は俯いたまま。

「今夜、アツシュを向かいに来るそうだ」

「・・・」

部屋の中に沈黙が佇む

「嘘よ！そんなの認めない！」

認めない・・・いや、信じない

イルが抗議する

その目には涙がうつすらと浮かんでいた。

「そうだ！アツシュ兄がいなくなるなんて嫌だ！」

ハンスも涙を目に睨んでくる。

別に、私が何かをした訳でもないのに……………

イラは何がなんだか分からないようにおどおどしている。

兄と姉は俯いたまま

「しょうがないだろう……………本物の親には勝てないよ」

そう、いくら私が彼を愛そうと、本物の親が来たら引き渡さなければいけない。

「まあ……………いつか来るとは思ってたよ」

そう言ったのは一だった。

流石は一番上の兄というか。

「結局、親が居る人はそうやっていなくなるんだよ」
自分に親が居ない……………そう聞こえた

「まあ、しょうがないんじゃない？こうなったらもう……………最後まで可愛がるしか……………」

今まで自分の本当の弟のように接してきたリサにはきつい話だ。

「で、でも！」

それでも、嫌だとまだ言うのはイルだけだ。

一も、リサも、そしてハンスも俯いて、

あるものは声を押し殺して泣き。

あるものは窓の外の青空を見つめ。

あるものは自分の中の喪失感と向き合った。

イルをとめたのは驚く事に。

アンシュルス、本人であつた。

S I D E O U T

「もう、いいよイル・・・」

そう、予測どおりと言つかなんというか、俺の親が向かいにくるよ
うだ。

「もう、いいよ・・・」

俯く、まるで、自分が自分でなくなるような感覚

「アツシュ・・・」

リサ姉が僕を優しく抱いてくれる

「リサ姉・・・・・・・・」

そっと、手を背中に回す。

きつと、最後の抱擁だろう。

その思いを噛み締め・・・・・・・・そして、放した

「ふん、せいぜい頑張つて生きるんだな」
そう背中から声を発したのは一兄だ

「うん・・・・・・・・」

それに一言答えた。

いや、一言で十分だろう。

立ち上がった一兄は僕のほうに歩き。
頭に手を置き、そして去っていった。
その去っていく背中を眺めながら考えた事は一つ。

あの背中は広がった。

「ローガ・・・いや、父さん。今までありがとうございました。」
頭を下げた。

これが、僕の今出来る精一杯。
心が壊れそうだ。
感情が溢れそうだ。

「ハンス、お前はちゃんとイルとイラの世話するんだぞ。
最後の言葉だろう。
でも、これくらいしか言えない自分が情けない。」

「・・・うん、分かった。」
鼻をすすり、目を腕で擦り。
それでも、答えた。
そんな弟が誇らしく。
もう、任せれると思った。

「イル、イラ」
妹達に振り向く。

「元気にやれよ？ハンスにあまり迷惑をかけるなよ？」
そう、言ったただけだった。

それ以外、思いつかない。

「・・・・・・・・」

二人とも俯き涙を落とすことしかない。
流石に、妹達にはきつかったのだろう。
何も発さない。

そして、妹達は寝室で泣き疲れ、眠りつき。
ハンスは、勉強をはじめ。

ーはいつもの用に力仕事を始めた。
リサは料理の支度をはじめた。

そんな日常の中、俺は引き取られるのだった。

親との生活は貧しかった。
しかし、その中にも喜びはあった。

まず、親と居られる事。

貧しくとも、親はいつも俺のことを考えてくれた。
学校に行けるようになった。

地方の小さな学校だったが、友達も出来た。
字の読み書きも出来るようになった。

親に引き取られ5年が過ぎるころには、俺も仕事が出来る歳になった。

11歳となれば、働き口は多かった。

荷物運び、ウェイター、馬車の見張り。

小さい事だったが、仕事が出来ようになれば家族の負担が減る。
そう思った。

しかし、そんなこともすぐ引き裂かれるのであった。

運命のように、宿命のように。

必然的、なのか偶然なのか。

人生とは非情だよ。

生きていく事はつらいよ。

そんなことだった。

episode 2 Change (後書き)

なんだか、次の展開が読めちゃうかもしれませんwww

感想とか待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2846r/>

神の子戦争

2011年4月23日22時21分発行